しがらみを生き抜く

人間学のキーワード

社会関係資本

Social Capital

稲葉陽二　日本大学教授

社会関係資本のもっとも喧伝された定義は、ハーバード大学の政治学者ロバート・パットナムによる「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・規範・ネットワークなどの社会的しくみの特徴」である。信頼も規範もネットワークも、それぞれ何冊もの本が書かれる膨大な蓄積があるものを三つひとくくりにしてしまったとんでもない概念であり、胡散臭いと怒り出す学者も存在する。彼らの怒りももっともではあるが、この三つをまとめると、それなりの付加価値が生まれるのだ。

第一に、ミクロの個人の世界を、コミュニティや社会全般と結びつけるミクロ―マクロ・リンクの視点を提供してくれることである。簡単にいうと、社会関係資本の観点があると、人びとの世界が広がっていくありさまを、肥満や禁煙の伝播（spread）などテーマごとに段階的にとらえることができる。筆者はここ数年、岸和田のだんじり祭を見物しているが、だんじりで培われたネットワークはミクロ―マクロ・リンクを体現している。だんじりの町内会内だけでなく、だんじりをもつ他の町内会とのつきあい、各町内のだんじり組織の長である年番とその連合会との関係、だんじりを実行するための岸和田市内の他のさまざまな組織との関係など、個人レベルのネットワークが町内を超えた外の世界へ次々と広がりをみせる。

第二に、これは東洋大学の今村肇先生も指摘されていた点だが、コミュニティレベルの社会関係資本は、地域の歴史的・文化的経緯、つまり時間軸も含んだ状態を表現できることである。これはコミュニティの特性を把握する際に有効である。社会関係資本を単純に「絆」といってしまうと、「絆」のありかたはコミュニティの歴史的・文化的経緯を反映してまちまちである。今地方創生がいわれているが、社会関係資本は地方創生のための地域診断手法も提供できる。

第三に、時間軸を含んでいるために、単純なネットワーク論よりずっと深い議論ができる。何人かの社会資源論者は一夜で社会関係資本論者へ看板を架け替えたと揶揄されるが、社会関係資本という概念を導入したために、ずっと深みのある議論を展開できるようになった。例えば、ネットワーク自体を資源としてとらえていた社会ネットワーク研究者であるナン・リンの社会関係資本論は『資本論』から説き起こしているが、これはネットワーク論だけでは無理があったように思う。

第四に、社会関係資本の概念は適用範囲が広く、さまざまな分野の人びとが語ることができ、学際的、職際的議論を可能にする。例えば筆者は、社会関係資本の健康への重要性を医学の分野で指摘しているハーバード大学公衆衛生大学院のイチロー・カワチ教授の夏期集中講座を聴講する機会に恵まれたが、純然たる文化系の筆者でも授業内容のほぼすべてを理解できた。つまり、社会関係資本は問題意識を共有できれば、専門が異なっていてもかなりの意志疎通ができる貴重な概念である。

ただし、社会関係資本は悪い面もある。「絆」はときに「しがらみ」でもあり、負の効果もあるのだ。見方を変えると、社会関係資本の負の部分をどのように抑制するかが政策課題である。